

「土砂災害へのアンテナを張ろう」

栃木県 宇都宮大学共同教育学部附属中学校 2年 岩佐 葵

音を消していたはずのスマートフォンから鳴り響く耳障りな警報音。東日本大震災後に何度も鳴り、心臓が掴まれるような恐怖心を掻き立てる緊急地震速報とは異なる、初めて聞く音だった。何とか、とすぐさまスマートフォンを手に取り表示を確認した。そこには「土砂災害警戒情報レベル4」とあった。真夏日が続く秋の気配が全く感じられない9月の初め、私の住む地域ではゲリラ豪雨が頻発していた。テレビのニュースや新聞記事で異常気象やゲリラ豪雨という言葉を目にする機会が多くなったからか、突然の大雨に驚くことはなくなっていた。慣れとは怖いものである。その日も窓の外を眺めながら「すごい雨だなあ。」と感じていた程度である。登下校時間の雨がそれほどひどいものではなかったせいもあるだろう。いつもの雨、ちょっとひどい雨、雨が止めばいつもの日常に戻る、という肌感覚だった。そこへ突然の警報音が鳴り響いたのである。市内全域と言ってもいいほど広範囲の河川が氾濫危険水位にあり、土砂災害や浸水の危険が想定されるため警報が発令された知らせだった。

土砂災害、浸水被害なんて私には関係ないと心のどこかで思っていた。事実、関東平野の北端に位置する地域に住んでおり、生まれてから一度もその被害を被ったことがない。確かに、ゲリラ豪雨に遭遇し荷物までずぶ濡れになったことはある。自宅近くの用水路がいつもの何倍もの水量でごうごうと流れる様子を見かけたこともある。だが、自宅が被害を受けたこともその危険を感じたこともなかった。そのため、土砂災害や浸水がどれほど怖く大きな被害をもたらすのか、その時自分は何をすればよいのか考えたこともなかった。当然、備えもしていなかった。幸いにも、その日の雨は夜には止み、警報も解除された。

下校時刻にはいつもの風景に戻り、大雨や土砂災害に対する私の警戒心も消えていた。翌日、今回の大雨による各地の被害がニュースで報じられていた。人的被害は少なかったものの、住宅への浸水や自動車の水没など物的被害が出ており、数時間のゲリラ豪雨にもかかわらずこれほどの被害が出るのかと怖くなった。私の住んでいる地域は比較的平坦なこともあり、今回の豪雨で土砂災害が起こることはなかった。しかし、これが異なる地形だったら、もっと長時間降り続いたら、と考えると不安を感じざるをえなかった。

では、どうすればこの不安を少しでも減らすことができるのだろうか。それには土砂災害と自身が住んでいる地域に対する正しい知識、平時からの備えが重要だと考える。国土の6割以上が山地である日本では、急流河川が多く、平地が狭いため山の斜面や谷の出口などに多くの人々が住んでいることなどが、土砂災害が多く大きな被害が出る原因と言われている。また、日本は世界の国々の中でも特に雨が多く、一年を通して平均して降るのではなく梅雨や台風などの季節にまとまって大量に降ることも拍車をかけている。加えて、温暖化によるとされる集中豪雨も増加し続けており、土砂災害を完全になくすことは不可能に近いだろう。だからこそ、被害を最小限に抑えることに重点を置いた対策を平時から心がけることが大切だ。たとえば、土砂災害警戒区域としてどこが指定されているのかを把握することだ。自身の居住地区だけでなく通勤通学途中や休日に行く予定の場所などが該当しているのかどうかを最新のハザードマップで再確認したい。そして、万が一、警戒区域として指定されていると知った場合は、平日頃から豪雨などの情報を積極的に取得し、先手を打った避難まで検討する体制を整えることも可能となる。土砂災害はひとたび発生してしまったら、それを止めることは非常に難しい。私たちは土砂が自らその動きを止めるまで、ただ見守ることしかできない。そうなる前に、土砂災害へのアンテナを常に張り、意識を高めておくことが大切だと考える。そして、警報音がスマートフォンから鳴る前に自主的な避難を検討することが、土砂災害による人的被害を少しでも減らす一歩になるだろう。

私の自宅は、幸いにも土砂災害警戒区域に指定されていなかった。通学路もあわせて確認したが警戒区域ではなかった。しかし、そこで安心して思考停止せずに、土砂災害への意識を常に持ち、

令和5年度 「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞（事務次官賞）

自分がどう行動すればより被害を減らすことができるのかを考え続けていきたい。それが土砂災害に対する不安を減らす一助になると考える。